

北区小学校のビオトープを訪れると、水が少し濁ったような黄緑色をしていました。池や水槽の水が緑色になるのは、水中に浮遊する微細な植物プランクトンが大量に増殖するため、「グリーンウォーター（緑水）」とも呼ばれます。ただし、その正体はいつも同じではありません。以前、濃い緑色になった別の水槽を調べたときには、視野を埋め尽くしていたのはほぼすべてヨツメモでした。では、今回の黄緑色の水の正体は何でしょう。

水を一滴採り、顕微鏡で観察してみると、そこに大量に現れたのが写真の「イカダモ」です。イカダモは緑藻の仲間で、数個の細胞が集まって「定数群体」をつくります。写真の個体も、緑色の細胞が4個並び、まるで丸太を並べた筏のようです。これが「筏藻（イカダモ）」という和名の由来です。広い意味でイカダモと呼ばれる仲間は複数の属があり、この個体は形態からデスマデスマス属 *Desmodesmus* の仲間である可能性があります。

驚いたことに、顕微鏡の視野に現れる植物プランクトンのほとんどが、このイカダモ類でした。つまり、ビオトープの水を黄緑色に染めていた「主役」は、この小さな生物だったと考えられます。一つ一つはわずか数十マイクロメートルほどですが、それが膨大な数に増えれば、水全体の色まで変えてしまいます。肉眼ではただの「黄緑色の水」でも、その一滴を顕微鏡でのぞけば無数の生命が見えてきます。水の色には、そのときのビオトープの生態系が映し出されているのです。

(2026年9月上旬／東京都北区)

